

セルフモニタリングと表情解読

遠 藤 健 治

我々は、様々な場面で様々な人々の顔を見て、その表情から当該人物が喜んでいるとか悲しんでいるといった感情状態に関わる判断を日常的に行っている。そのような作業を可能とする仕組みを説明する一案として、表情の特徴を照合してそのような感情状態であろうと推断するために、「喜び」「悲しみ」といった感情のカテゴリーを持っているという仮説がたてられている。情報処理の過程をあてはめるならば、個々の表情特徴にプロトタイプを当てはめ、特定の感情を帰属させるというトップダウン処理がされているとも言えよう。Ekman (1972), Ekman & Friesen (1975 工藤訳 1987), Ekman (2003 菅訳 2006) は、そのような感情カテゴリーには文化をこえて共通するものがあり、喜び、悲しみ、驚き、怒り、嫌悪、恐れを基本的感情と考え、表出する表情もこれに対応していると主張した。すなわち、表情による情動表出は民族や文化を越えて普遍性が高い（生得的である）というわけである。この、表情から対応する感情を認知できるというテーマは多くの研究者の関心を引き、様々な視点で研究が累積されている。ほぼ一貫して確認されているのは、感情の種類によって解読の正確さが異なるということである。概して、幸福や驚きについての解読は比較的正確であるのに対し、否定的な感情についての解読の正確さは低くなる傾向がある (Ekman & Friesen, 1975; Argyle, 1988)。二塚・尾田 (2006) は、意図的の表情と自発的の表情を用いて、動的な顔面表情の認知の正確さについて検討した結果、喜びと嫌悪は正しく識別されやすく、恐怖は誤判断が多いことを明らかにしている。これに加え、文化の違いによって解読の正確さが異なることも指摘されている。Russel (1994) が過去の欧米人の表情を対

象とした研究例を概括したところ、同じ欧米系被験者では幸福が95%以上の的中率となり、驚き、悲しみ、嫌悪、怒り、恐れという順番になっているが一番の的中率の低い恐れでも80%に近い値となっており、概して的中率は高い。一方、非欧米系被験者では、幸福が一番的中率が高いものの90%をわり、以下の的中率も60%台～70%台となり、的中率はかなり下回っている。Shimoda, Argyle, & Bitti (1978) は、イギリス人、イタリア人、日本人の表情を呈示してどの程度的中できるかを検討したところ、イギリス人、イタリア人は自国人の表情を正しく解読するのに対し、日本人の表情的中率はかなり低いものになった。そして、日本人自身も必ずしも自国人の表情を正しく解読できるとは限らなかった。このような適中率の差は、当該文化における表出規則 Display Rule によってのみ説明されるとも考えがたい。また、Ekman の使用した表情画像は、顔のパーツを動きの単位 Action Unit に分割し、その組み合わせによって作成されたもので、誇張された、不自然な顔という印象は否めない。表情表出者に悲しかった経験や楽しかった経験を思い出して表情を再現してもらったり、感情を喚起するような映像を呈示して自然に表出した表情を記録したりして表情刺激を作成し、その解読の程度を検討するという実験も行われている。Wagner, MacDonald, & Manstead (1986) は自然な表情表出がどの程度解読できるかを検討したところ、幸せは50%弱、嫌悪は23%弱、怒りが13%弱と、かなり解読率が低いことを報告している。尾田 (2004) も日常生活でみられるレベルの表情強度である写真を用いて実験を行った結果、認識率は非常に低いものであり、かつアクションユニットの動きに共通性がない表情と混同されていた。二塚・尾田 (2006) によれば、自発的表情的表情強度は意図的表情的より弱いということで、自国人であろうと解読の精度は低くなるであろうことは予想される。

表情認知の生得性についての賛否はあるにしても、相手の顔から感情状態が分かるかということがこれらの研究の中核的関心事であろう。しかし我々は、単に相手の感情状態を知るに留まるわけではない。その相手との相互作用を行うこともあり、その相手への働きかけの仕方を、相手の感情をどう解読するか

によって変えることになるわけである。たとえば、吉川・中村（1997）は、様々な発話状況を設定し、相手の顔の表情の違いが発話行動に影響を及ぼすか検討しており、発話の丁寧さ、発話開始時間、流暢さ、話しかけやすさ、発話の自然さ等に影響が現れることを報告している。怒りの表情の相手に対しての方が笑顔の相手に対してよりも謝罪はより丁寧になるのである。また裁判において、同じ罪でも、被告人が怒りの表情を表出している場合よりも、悔悛の表情を浮かべている方が、陪審員は罪を軽減する傾向のあることも報告されている（MacLin, Downs, MacLin, & Caspers, 2009）。このように相手の状態にあわせて言葉づかいや行動、評価等を調整するのだが、その際、相手の表情は相手の感情状態を知る有力な手がかりである。この感情の推測に失敗すると、相手にあわせた行動の調整も失敗し、円滑なコミュニケーションが阻害されることになる。

さらに、表情は個人の経験している情動の表出という面ばかりではなく、意思や態度等他者に対して意図的もしくは無意図的に発信されるメッセージという面も有する。我々は日常、悲しんでいるとか怒っているという基本感情に関する単純な情報ではなく、手に持っている商品を買うつもりだとか相手の意見に耳を貸すつもりはない、といったより繊細な対人情報を、顔のみでも伝達し合っている。すなわち、表情表出は対人行動でもある。表情は社会的な相互関係のなかで重要な役割を演じ（Argyle, 1988）、ほとんどのコミュニケーション状況において中心的なものとなっているならば（Harrison, 1974; Hochberg (1963 田中訳 1966)), 表情の表出と解釈の精度は、個人の対人特性や社会的スキルと密接に関連すると考えられる。すなわち、表情の表出と解釈における個人差要因も重要な検討事項であろう。

たとえば、大坊（1991）は、非言語的表出性（ACT）を社会的スキルの指標として、表情表出のあり方を検討し、社会的スキルの高い人は、表情の変化が豊かであるとの所見を見出している。さらに上出・大坊（2007）は、様々な感情を表すよう求められたときの顔の動きを調べ、怒りの表情を表出する際、社会的スキルの高い男女が眉間にしわをよせるような表情をしているのに対し

て、社会的スキルの低い男性は目の間の幅を広めており、幸福の表情を表出する際、非言語表出スキルの高い女性口を大きく横に広げ「にっこり」笑う一方で、スキルの低い男女は、口の表情変化が乏しいという観察を得ている。社会的スキルの低い人々は、単に表情変化が乏しいというだけではなく、表情表出の仕方が不適切であり、これには所属する文化圏での表出の学習が不足している可能性もある。

社会的スキルと表情解読との関連では、大坊・三部・佐藤（1996）は、大学生を対象として、驚き、幸福＞侮蔑＞恥、嫌悪、怒り、悲しみ、恐怖の順で正確に解読されていた、また非言語表出スキルの高い者は肯定的感情についても否定的感情についても正確に解読できていたと報告している。大坊・高橋・磯・橋本（2001）も「解読は記号化スキルと高い相関性を示し、相乗効果が働くとも言える。」と述べている。

他者との関係で自己の言動を調整する傾向は、セルフモニタリングでとらえることも出来る。これは Snyder（1974）によって提唱された概念で、対人関係や社会的場面において、その個人が望む適切な自己呈示を行うために、他者に与える自己の印象や感情表出に注意を払い、それらに基づいて自己の行動を修正し、統制する傾向における個人差と定義される。セルフモニタリング傾向の高い個人は、自分の言動・外見等が周囲の人から適切と見られるかに関心を持つため、周囲の人間の言動・外見を一種のガイドラインとみなして、自分の言動・外見を調整しようとする。したがって、セルフモニタリング傾向の高い個人にとって、周囲の状況に適した自己呈示を行うためには、当然のことながら周囲の状況をより正確に認識することが重要である。周囲の人間の表情を正確に解読することは、対人関係の構築上必須である。一方、セルフモニタリング傾向の低い個人の関心事は、周囲の人間の状態ではなくまた自己の言動の適切さでもなく、自分の内的な感情や態度であるので、他者の表情を正確に解読することへの必要性は低いであろう。セルフモニタリング傾向の高い個人と低い個人とでは表情解読の正確さに相違が出てくると予想される。吉川・飯塚・長崎（2001）は、女子学生を対象にして、セルフモニタリングの高い個人は低

い個人より、人の表情や態度などからその人の気持ちや行動の意味を感じとるノンバーバル感受性が高いという結果を報告している。Estow, Jamieson & Yatesa (2007) も、セルフモニタリング傾向の高い個人は、観察対象の表情を模倣することが多いとしている。セルフモニタリング傾向の高い個人は他者の表情表出に敏感であることがうかがえるが、鈴木 (1991) は大学生を被験者として、他者の表情をどれだけ正確に解読できるかとセルフモニタリングとの間には何ら相関関係は認められなかったと報告しており、他者の表情に注意を払う傾向が強いことと正確に解読できることとは直結しない可能性もある。

また、上掲の研究例でも Snyder (1974) による尺度を使用している例と Lennox & Wolfe (1984) による尺度を使用している例が混在しているように、セルフモニタリングはどの尺度を使用して測定されたのかも、結果に影響を及ぼす要因となっている。Snyder (1974) は自己呈示に関わる5つの側面－(1)社会的行動の適切さへの関心、(2)他者の表出行動への感受性、(3)自己呈示を統制もしくは修正する能力、(4)特定の状況下でのこの能力の使用、(5)状況に応じて社会的行動を変える能力－を測定しながらセルフモニタリング傾向としてはその合計点によって与えられるとした。しかし、これだけ異なる側面を合計することで、セルフモニタリングという概念規定を実現しうるのか、その妥当性が疑問視されている。Lennox & Wolfe (1984) は、Snyder (1974) を批判し、(1)他者の表出行動への感受性と(2)自己呈示を修正する能力の二側面のみを測定する改訂版を提案している。内容的には自己統制感に近いものになっている。一方、Briggs, Cheek, & Buss (1980) は、(1)外向性、(2)他者志向性、(3)演技性の3因子を抽出し、因子ごとのセルフモニタリング傾向得点の算出を提唱している。同じセルフモニタリングという概念を扱いながら、それぞれ測定しているものは同一とは言えない。セルフモニタリングは概念としては明快であるが、それを測定する尺度はさらに止揚する余地が残っていると考えられ、様々な尺度を用いて表情解読との関連を検討する意義があろう。

本稿では、本学青山スタンダード科目「自己理解」受講生に対して、授業の

一環として表情解読課題を与え、どの程度解読しうるか、またその解読成績はセルフモニタリング傾向の高低によって変動するのかを検討した結果を報告する。

事前の仮説としては、セルフモニタリング傾向の高い個人は他者の表情表出およびその正確な解読に自身のこれからの行動調整がかかっているため、より正答数が多いであろうと予測された。

なお、本報告は、授業において受講者から収集したデータを記述・検討したものであるため、学内誌に掲載し、同受講生にクラス全体の傾向をフィードバックするという目的を持つものでもある。

方 法

被験者 本学 2009 年度青山スタンダード科目 1 年次配置科目「自己理解（総合科目）」受講生 252 名（女性 174 名、男性 78 名）。

表情解読の測定 表情を解読させるための刺激としては、Matsumoto & Ekman (1988) の JACFEE (Japanese and Caucasian Facial Expressions of Emotion) と JACNeuF (Japanese and Caucasian Neutral Faces) より、怒り、軽蔑、嫌悪、恐れ、幸福、悲しみ、驚き、無表情に該当する顔を 2 つずつ選択した（幸福は 1 つのみ）。その際、同表情データベースには Japanese と記されている顔も収録されているが、予備的に数名の心理学科学生に示したところ日本人としては何か違和感があるという意見が多く出され、また、同授業にはアジアからの留学生も出席しているところから Japanese とすると被験者の中に文化の異同が含まれることになってしまうため、いずれも Caucasian から選択することとした。

教室前面のスクリーンに 1 枚ずつ 15 点の顔刺激をランダムに 5 秒ずつ呈示し、それぞれ「怒り、軽蔑、嫌悪、恐れ、幸福、悲しみ、驚き、無表情」のいずれに該当するかを記録させた。

セルフモニタリング傾向の測定 セルフモニタリング傾向を測定するにはいくつかの尺度が存在するが、ここでは「外向性」「他者志向性」「演技性」の下位

概念を捉えられる Briggs, Cheek, & Buss (1980) による尺度を用いた（訳文は、Buss (1986 大淵訳 1991) による）。遠藤（2009）の因子分析結果により選出された以下 15 項目を呈示し、それぞれどの程度自分にあてはまるかを 7 段階で回答させた（項目末尾の(*)は逆転項目を示す）。

- ・人を喜ばせたり歓心をかうために、自分の意見（行動）をかえることはないだろう(*)他
- ・たぶん上手な俳優になれるだろう演
- ・人の集まりは気づまりで、私はめだつことはないし、まためだちたくもない(*)外
- ・人から好かれたり、人とうまくやっていくために、期待されている通りにふるまうことが多い他
- ・私は、人に好かれるようにふるまうのが、得意な方ではない(*)外
- ・人づきあいが苦手で、思ったように自分が表現できない(*)外
- ・自分をエンタテイナーだと思ったことがある演
- ・パーティーでは、私はもっぱら人の話や冗談を聞く側である(*)外
- ・私の行動には、たいてい、自分の本当の感情や態度や信念が表れている(*)
- ・ジェスチャーとか、即興を必要とするゲームでうまくできなかったことがない(*)外
- ・集団の席で、私が注目の的になることはほとんどない(*)演
- ・たぶん、自分を印象づけたり、人を楽しませるために、演技しているように思う演
- ・実際は楽しくないのに、楽しそうなふりをすることがよくある他
- ・ほとんど知らない話題であっても、即席でスピーチができる演
- ・本当は嫌いな人であっても、友好的なふりをすることができると思う他
- ・どのように行動したらよいか自信が持てない場面では、人の行動を手がかりにする他

セルフモニタリング傾向については、表情解説測定の前週に、「自己呈示」に関する講義の一環として測定を実施した。データ回収は無記名であるが、測定間の対応を取るため、各測定結果を回収する際に（データと個人名を関連づけないこと、データは統計的に処理すること、データを提出しなくとも成績上不利にならないこと等を説明した上で）学生番号の部分的記載を求めた。

結 果

判定された表情の分布 全被験者を混みにして、表情刺激ごとに、どの感情が表出されていると判定されたか、その相対度数を表1に示した。マトリックスの対角線上の比率が正答率ということになる。もっとも正答率が高いのは幸福94%と驚き93%で、間違いはきわめて希である。次いで高いのが無表情87%と悲しみ80%である。悲しみの誤答の中では軽蔑と嫌悪というネガティブな感情との混同がやや見られる。そのネガティブな感情である怒り、軽蔑、嫌悪、恐れは正答率が前者よりかなり下がり、恐れに至っては55%と半数を辛うじて上回る程度である。

誤答の分布を見ると、怒りと嫌悪が互いに10数%の取り違えが見られ、嫌悪と怒り・軽蔑の間でも同様の誤答が現れている。これらのネガティブな感情の間に親近性があることが推測される。また、軽蔑を無表情と判定しているケ

表1. 判定された表情の分布

		判定							
		1 怒り	2 軽蔑	3 嫌悪	4 恐れ	5 幸福	6 悲しみ	7 驚き	8 無表情
刺激	1 怒り	73%	8%	15%	1%	1%	2%	0%	1%
	2 軽蔑	4%	64%	5%	1%	3%	1%	0%	20%
	3 嫌悪	13%	18%	64%	1%	1%	1%	1%	1%
	4 恐れ	3%	5%	8%	55%	0%	2%	26%	2%
	5 幸福	1%	3%	1%	0%	94%	0%	0%	0%
	6 悲しみ	1%	6%	9%	2%	0%	80%	0%	1%
	7 驚き	0%	3%	1%	2%	1%	0%	93%	0%
	8 無表情	4%	4%	2%	1%	1%	0%	1%	87%

ースが20%もあるのは特筆に値する。

男女差 全15刺激の正答数を男女別に求めてみると、女性11.7、男性10.7となり、女性の方が有意に正答数が多かった ($t(250)=3.309, p<.01$)。

セルフモニタリングと表情解読 セルフモニタリング尺度への回答を、「あてはまる」を7点～「あてはまらない」を1点と（逆転項目については、「あてはまる」を1点～「あてはまらない」を7点と）得点化し、全項目の合計点と、「外向性」「演技性」「他者指向性」の下位概念の因子ごとに尺度得点を求めた。下位概念ごとに、想起対象と性別の組み合わせについて平均値を求めると表2が得られる。

表2. セルフモニタリングの平均得点

下位概念	想起対象	女性	男性	総和
外向性	恋人	3.20	3.31	3.23
	片思い	3.16	3.12	3.15
	友人	2.99	2.90	2.95
	総和	3.11	3.07	3.09
演技性	恋人	2.53	3.01	2.69
	片思い	2.79	2.71	2.77
	友人	2.62	2.53	2.59
	総和	2.65	2.72	2.67
他者志向性	恋人	3.61	3.25	3.49
	片思い	3.62	3.67	3.63
	友人	3.69	3.46	3.60
	総和	3.64	3.44	3.58

下位概念間の比較では、他者志向性が最も得点が高く、他者に合わせて自分の行動を調整しようとする傾向が見て取れる。外向性も中点(3.0)よりはやや高い点数になっており、比較的素直に自己表現ができるようである。演技性は中点(3.0)以下で、演技することへの苦手意識ないし嫌悪感の反映と受け取れ

る。下位概念ごとに見ていくと、外向性では性差はなく、友人を想起した人よりも恋人を想起した人の方が外向性の得点が高い。この段階では恋人がいるから外向性が高くなったのか、外向性が高いから恋人がいるのかの識別はできないが、両者の関係は示唆的である。演技性では、対象×性別の交互作用が見られ、女性では恋人を想起した人が最も得点が低いのにに対して男性では恋人を想起した人が最も得点が高くなっている。他者志向性では想起対象による差はなく、男性よりも女性の方が得点が高い。女性の方が周囲に合わせる傾向が強いということである。

これらのセルフモニタリングの傾向と表情解読との関連について、まず、得点分布間の単純な対応関係を見るために、これらの尺度得点及び合計点と表情解読正答数との間で積率相関係数を算出した。その結果、外向性と正答数では $r=.155$, $p<.05$, 演技性と正答数では $r=.193$, $p<.01$, 他者志向性と正答数では $r=.151$, $p<.05$, 合計点と正答数では $r=.230$, $p<.01$ とすべての組み合わせで有意な相関関係が得られた。いずれもセルフモニタリング傾向の高いほど正答数が多くなるようである。

つぎに、これを詳細に検討するため、尺度得点をそれぞれ標準化し、-.50未満を低群、.50以上を高群とグループ化した。そして、セルフモニタリング合計点および下位概念因子ごとに、正答数を従属変数とし、セルフモニタリングの高低(2)×性別(2)の分散分析を行った。その結果、外向性得点では(女性・外向性高群の平均正答数 12.06 / 女性・外向性低群 11.75 / 男性・外向性高群 11.60 / 男性・外向性低群 9.88), 外向性の主効果 ($F(1,156)=10.491$, $p<.01$) も性別の主効果 ($F(1,156)=13.819$, $p<.001$) も有意であり、かつ交互作用も有意であった ($F(1,156)=5.064$, $p<.05$)。女性の方が男性より正答数に有意に多く、外向性高群の方が低群より正答数に有意に多い。そして、男性と外向性低群とが組み合わせると、正答数は 10 を下回る。自分の気持ちを素直に出せない男性は、女性全体と比べても、他者の表情を読むのも苦手なようである。

演技性では(女性・演技性高群の平均正答数 12.66 / 女性・演技性低群 11.64

／男性・演技性高群 11.77／男性・演技性低群 9.90), 演技性の主効果 ($F(1,153)=20.155, p<.001$), 性別の主効果 ($F(1,153)=16.804, p<.001$) ともに有意であった。外向性と同様, 女性の方が男性より正答数が有意に多く, 演技性高群の方が低群より正答数が有意に多い。ここでも演技性低群の男性がとりわけ正答数が低い, 交互作用は有意ではない。

他者志向性では (女性・他者志向性高群の平均正答数 11.91／女性・他者志向性低群 11.05／男性・他者志向性高群 11.32／男性・他者志向性低群 10.08), 他者志向性の主効果 ($F(1,158)=7.360, p<.01$), 性別の主効果 ($F(1,158)=4.052, p<.05$) ともに有意であった。これも, 女性の方が男性より正答数が有意に多く, 他者志向性高群の方が低群より正答数が有意に多い。

セルフモニタリング全項目合計得点では (女性・合計高群の平均正答数 12.25／女性・合計低群 11.32／男性・合計高群 11.77／男性・合計低群 9.47), セルフモニタリングの主効果 ($F(1,158)=23.337, p<.001$) も性別の主効果 ($F(1,158)=12.154, p<.001$) も有意であり, かつ交互作用も有意であった ($F(1,158)=4.147, p<.05$)。総じて女性の方が男性より正答数が有意に多く, セ

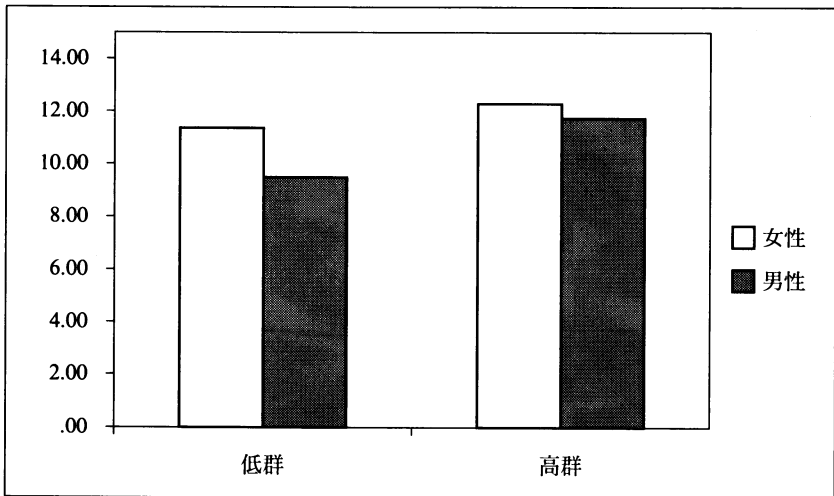


図 1. セルフモニタリングと表情解読

セルフモニタリング傾向の高い群の方が低い群より正答数が有意に多い。そして、セルフモニタリング傾向の高い女性と、セルフモニタリング傾向の低い男性の間に大きな開きが見られている。

表情ごとの傾向 表情の種類によって、性別やセルフモニタリングの影響の出方が異なるかどうかを見るために、表出感情ごとに、正答数を従属変数とし、セルフモニタリングの高低(2)×性別(2)の分散分析を行った。表3に、それぞれの分析で有意となった主効果、交互作用のF値と差の状態を示した(アスタリスクは有意水準を示す。* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$)。

怒りと軽蔑では、性別による相違もセルフモニタリング傾向による相違も僅かしか検出されていない。これに対して幸福では、すべてのセルフモニタリング傾向において交互作用が認められている。すなわち、女性では高群と低群との間に正答数の違いはないが、男性では低群は高群よりも正答数が有意に少ない、という傾向である。もともと幸福は93%が正解する表情であったが、その中でセルフモニタリングの低い男性は幸福の表情の同定にやや劣ることが示されたわけである。

セルフモニタリングの主効果が検出されているケースでは、すべて高群が低群よりも正答数が多いという結果である。下位概念ごとに見ていくと、演技性では恐れ、嫌悪、悲しみ、幸福の4感情で主効果が得られ、関与が大きいようである。外向性も軽蔑と恐れで主効果が認められた。一方、他者志向性の主効果は1例も見られず、同じセルフモニタリングでも演技性とは異なる結果となった。

性差に関しては、表出感情ごとに分析するとあまり顕著には表れてはいないが、主効果が見られるケースでは、やはりすべて女性の方が男性よりも正答数が多いという結果となっている。

表 3. 表出感情ごとの分散分析結果のまとめ

	性別	外向性	性別×外向性	性別	演技性	性別×演技性	性別	他者志向性	性別×他者志向性	性別	SM合計点	性別×SM合計点
怒り				5.008*								
				女性>男性								
軽蔑		4.83*									8.046**	
		低群<高群									低群<高群	
恐れ	9.047**	10.458**			10.752**						12.417***	
	女性>男性	低群<高群			低群<高群						低群<高群	
驚き	4.161*			4.408*								
	女性>男性			女性>男性								
嫌悪				6.141*	7512**						5.123*	
				女性>男性	低群<高群						低群<高群	
悲しみ			4.241*		3.849*							
			女性 低群>高群, 男性 低群<高群		低群<高群							
幸福			6.547*		5.609*	4.429*			4.205*		8.619**	7.758**
			女性 低群=高群, 男性 低群<高群		低群<高群	女性 低群=高群, 男性 低群<高群			女性 低群=高群, 男性 低群<高群		低群<高群	女性 低群=高群, 男性 低群<高群
無表情	9.98*			6.832**					4.917*		8.735**	
	女性>男性			女性>男性					低群<高群		低群<高群	

考 察

表出される感情の種類と解読の正確さ 今回のデータでも、表出される感情により解読の正確さに違いが現れた。幸福と驚きの正答率が高く、悲しみがそれに準じ、怒り、軽蔑、嫌悪、恐れは正答率が前者よりかなり下がるという結果となった。Shimoda, Argyle, & Bitti (1978) は、イギリス人、イタリア人、日本人の表情を呈示してどの程度的中できるかを検討したところ、日本人評価者がイギリス人の表出を判断した場合、幸福 77%, 悲しみ 91%, 恐れ 82%, 怒り 68%, 嫌悪 43%, 驚き 40% であった。日本人が欧米系の表情を判断するという点では類似した状況であるが、今回の結果の方がやや的中率が高いようである。感情の種類に関しては、幸福の正答率が高く、嫌悪、怒りの正答率が低いのは共通しているが、恐れと驚きではだいぶ開きが見られる。二塚・尾田 (2006) では、喜びと嫌悪は正しく識別されやすく、恐怖は誤判断が多いとされている。対人関係を構築する上で、相手の感情がポジティブであれば接近的行動を始動できるため、幸福の感情の解読の的中率が高いのは、重要な点であろう。多くの研究で幸福の表情の正答率が高いというこの一点は共通しており、生得的な感情カテゴリーを持っているという仮定も説得力を持つ。一方、相手の感情が拒否的であれば回避行動をとらなければならないので、正しく嫌悪や軽蔑の表情を解読することも重要である。しかし、嫌悪や軽蔑の的中率はあまり安定していない。中村 (1994) は、日米の大学性が感情をどの程度表出するかを検討し、否定的感情の中で、嫌悪はもっとも表出しにくく、悲しみの方が表出しやすいという結果を得ているが、互いに嫌悪の表情表出を抑えているために、嫌悪の表情識別がうまく作動しないのかもしれない。また今回の結果で興味深いのは軽蔑を無表情と判定しているのが 20% にも達している点である。欧米系の人が軽蔑の表情を浮かべても、アジア系の大学生の 5 人に 1 人はそれを軽蔑だとは受け取らないということである。軽蔑の表情は、口の片側の口角だけを上げた（口が斜めの線のような）状態で、他のアクションユニットには大きな特徴的变化はない。軽蔑と解読するには口の角度にのみ注目すればよい。逆に言えば、それが軽蔑の表情であることを学習すれば、以後誤答の比

率は減少するであろう。この表情に関しては多分に後天的な学習の側面があるものと思われる。いずれにしても、ネガティブな感情表出・感情解読は文化による規定を大きく受けている。ポジティブな感情とネガティブな感情とでは、解読のメカニズムが異なる可能性もある。

セルフモニタリングの傾向 セルフモニタリング尺度への回答では、他者志向性が最も得点が高く、他者の行動を見て自分の行動を調整する傾向が（とりわけ女性に）見られた。この傾向を測定する項目を見ると、「人を喜ばせたり歓心をかうために、自分の意見（行動）をかえることはないだろう（逆転項目）」「人から好かれたり、人とうまくやっていくために、期待されている通りにふるまうことが多い」「実際は楽しくないのに、楽しそうなふりをすることがよくある」「本当は嫌いな人であっても、友好的なふりをすることができると思う」「どのように行動したらよいか自信が持てない場面では、人の行動を手がかりにする」という内容で、周りの目が気になって、本意ではないが人に合わせている、ということである。これは、同じセルフモニタリングでも Lennox & Wolfe (1984) の「自己呈示を修正する能力」とはいささかニュアンスを異にする。後者が環境に合わせて能動的に自己を統制できるかどうかを見ているのに対し、他者志向性は受動的に環境に追随する行動傾向で、防衛的の自己呈示に近い。セルフモニタリングという概念からは、この他者志向性を測定することが妥当であると思われる。

演技性は全体としては比較的低得点であった。人前でうまく話をしたり、冗談を言ったりするのがそれほど得意ではない、ということであろう。ここで興味深いのは、恋人を想起した女性が最も得点が低いのに対して、恋人を想起した男性が最も得点が高くなっていることである。女性は恋人には最も率直に対応するのに対し、男性は恋人に対するときには最も演技しているわけである。恋人からどのようにみられたいのかに違いがあるのであろう。今後、戦略的自己呈示の側面から検討することが有用である。

セルフモニタリング傾向の高低と表情解読の正確さの関連を検討したとこ

ろ、セルフモニタリング傾向の高い被験者の方が、表情解読の正答数が多かった。下位概念の外向性、演技性、他者志向性すべてにおいても、同様の有意差が検出された。周囲の情報を得て、適切な行動をとるよう自分の言動を調整するためには、正確な状況把握が必要である。相手の表情から相手がどのような感情を経験しているのかを正確に解読できれば、適正な自己呈示が可能になる。今回の被験者からは、そのような事前にたてた仮説を確認することができた。

しかし、表情を正確に解読する必要性があるということと、実際に正確に解読できるということは別である。顔の部位と表情認知との関連を検討した研究では、個々の情動の認識にとって重要な部位は異なるという所見が見いだされている（吉川、1997；菅生・松田・山根、1997；望月・中脇・渡辺、2006）。たとえば伊藤・吉川（2005；2007）は、人が顔から感情を読みとる際に、怒り・悲しみ・驚きでは顔の上半分、嫌悪・幸福では下半分の影響が強いことが認められたと報告している。セルフモニタリング傾向の高い人は、顔のどのパーツを見れば表情が解読しやすいのか、そのような照合枠（所謂目のつけどころ）を経験的に作り上げている可能性もある。アイカメラを用いた視線研究への展開も考えられる。

性差と表情解読 一貫して、女性の方が男性よりも表情解読の正答数が多いという結果が得られた。性差に関しては、Hall（1984）が、顔の表出に関する研究125例を検討し、女性の方が正確さが優っていることを報告しており、大坊・上出・村澤・趙・毛・高橋（2007）も表情表出の程度は女性の方が男性よりも高いとして、表情表出に女性の優位性があることを示しているが、解読の正確さについても、女性は男性に比べて表情の解読能力に優れているという結果が多数報告されている（Argyle, Salter, Nicholson, Williams, & Burgess, 1970; Rosenthal & DePaulo, 1979; Hall, 1984; 二塚・尾田（2004））。表情は、顔によるコミュニケーションの中核であり、単に感情表出のチャンネルというばかりでなく、態度・意思伝達のチャンネルでもある。アジア圏でも西欧文化圏でも、女性の方が表情の表出と解読に優れているということは、女性の方が顔に

よるコミュニケーションをより正確に遂行していると推測される。なぜ女性の方が優位かということについては、女性は男性よりも顔を見ることが多いから、表情解読の正確さが優っている (Rosenthal & DePaulo, 1979), 女性は男性よりも NVC 全般により多く注意を払っているからより正確に表情を解読できる (Argyle, Salter, Nicholson, Williams, & Burgess, 1970), 女性の方が顔に関わるあらゆる事柄に男性よりも多く関わっており、顔を通して意図的なメッセージを伝えているために解読にも優れている (Hall, 1984), 女性と男性とでは、非言語的の手がかりを獲得したり利用したりするところに根本的な相違がある (Riggio & Friedman, 1986) といった推論が述べられている。いずれも女性にとって、顔というチャンネルが対人関係において重要視されていることを基盤としている。これらの文化圏では、顔に化粧を施すのは圧倒的に女性の方が多ということも、その反映の一つであろう。化粧をするために鏡に向かって自分の顔と対峙することで、表情表出と解読のスキルを日々鍛錬している可能性もある (その意味では、意図的な表情表出・解読は生得的に組み込まれているのではなく、社会的学習の産物であるという立場に立つことになる)。これらの文化圏の政治・経済・制度は、基本的には男性優位の中で (すなわち男性の「言語」によって) 構築されてきた経緯を持っている。とすると、女性たちが歴史の中で、言語にはよらないチャンネルを通して意思伝達を行うスキルを精錬させてきたという可能性も考えられよう。

いずれにしても、女性において、顔を正確に読むことの必要性が存在するか、ないしは顔を正確に読むことで何らかの社会的利点がもたらされていると言えるだろう。

文 献

- Argyle, M (1988). *Bodily communication*, Second edition. London: ethuen & Co. Ltd.
 Argyle, M., Salter, V., Nicholson, H., Williams, M., & Burgess, P. (1970).
 The Communication of Inferior and Superior Attitudes by Verbal and Non-Verbal Signals. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 9, 221-231.
 Briggs, S. R., Cheek, J. M., & Buss, A. H. (1980). An Analysis of the Self-Monitoring Scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38, 679-686.
 Buss, A. H. (1986). *Social Behavior and Personality*. Lawrence Erlbaum Associates (大淵

- 憲一 監訳 1991 『対人行動とパーソナリティ』 北大路書房).
- 大坊郁夫 (1991). 非言語的表出性の測定: ACT 尺度の構成. 北星学園大学文学部紀要北星論集, **28**, 1-12.
- 大坊郁夫・上出寛子・村澤博人・趙 鏞珍・毛 新華・高橋直樹 (2007). 顔形態特徴の日中韓比較(1): 顔面表情に伴う顔形態の文化比較(対面コミュニケーション-顔を中心のメディアとした) 電子情報通信学会技術研究報告. HCS, ヒューマンコミュニケーション基礎 **107**(241), 13-18,
- 大坊郁夫・三部五月・佐藤靖子 (1996). 顔の表情認知における社会的スキルの役割(2)-表情次元と社会的スキル- 東北心理学研究, **46**, p.75.
- 大坊郁夫・高橋直樹・磯友輝子・橋本幸子 (2001). 顔面表情の表出と解読における社会的スキルの役割. 電子情報通信学会技術研究報告. HCS, ヒューマンコミュニケーション基礎 **101**(333), 17-22.
- Ekman, P. (1972). Universals and cultural differences in facial expression of emotion. In Cole, J. (Ed.) *Nebraska Symposium on Motivation* Vol.19, University of nebraska Press, p.207-283.
- Ekman, P. & Friesen, W. V. (1975). *Unmasking the face*. Prentice-Hall (工藤力訳 1987『表情分析入門』誠信書房).
- Ekman, P. (2003). *EMOTION REVEALED: Understanding Faces and Feelings*. The Orion Publishing Group Limited, London (菅靖彦訳 2006『顔は口ほどに嘘をつく』河出書房新社).
- 遠藤健治 (2009). 表情表出による自己呈示 青山スタンダード論集, **4**, 85-118.
- Estow, S., Jamieson, J. P., & Yates, J. R. (2007). Self-monitoring and mimicry of positive and negative social behaviors. *Journal of Research in Personality*, **41**, 425-433.
- 二塚亜実・尾田政臣 (2004). 顔面表情の表出と認知に関する実験的研究: 性別と非言語的表出性の効果について 電子情報通信学会技術研究報告. HIP, ヒューマン情報処理 **104**(450), 93-98.
- 二塚亜実・尾田政臣 (2006). 表情認知の正確性に関する研究-意図的表情と自発的表情を用いて-. 電子情報通信学会技術研究報告. HIP, ヒューマン情報処理 **105**(536), 89-92.
- Hall, J. A. (1984). *Nonverbal Sex Differences*. John Hopkins University Press.
- Harrison, R. P. (1974). *Beyond words: An introduction to nonverbal communication*. Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, New Jersey.
- Hochberg, J. E. (1963). *Perception*. Prentice-Hall, Inc, Englewood Cliffs, N. J. (田中良久訳 1966『知覚』岩波書店).
- 伊藤美加・吉川左紀子 (2005). 表情認知における顔部位の相対的重要性: 人種・性別による比較. 日本感情心理学会第 13 会大会予稿集 p.29.
- 伊藤美加・吉川左紀子 (2007). 表情認知における顔部位の相対的重要性-顔全体との比較. 日本感情心理学会第 15 会大会予稿集 p.20.
- 上出寛子・大坊郁夫 (2007). 3 次元計測法による顔面表情に伴う顔形態特徴の測定(2): 日本人大学生の社会的スキルと顔面表情との関係 電子情報通信学会技術研究報告. HIP, ヒューマン情報処理 **107**(60), 113-118.
- Lennox, R. D., & Wolfe, R. N. (1984). Revision of the Self-Monitoring Scale. *Journal of*

- Personality and Social Psychology*, **46**, 1349-1364.
- MacLin, M.K., Downs, C., MacLin, O.H., & Caspers, H.M. (2009). The effect of defendant facial expression on mock juror decision-making: The power of remorse. *North American Journal of Psychology*, **11**, 323-332.
- Matsumoto, D. & Ekman, P. (1988). Japanese and Caucasian Facial Expressions of Emotions (JACFEE) and Neutral Faces (JACNeuF). [Slides]. San Francisco, CA: Department of Psychology, San Francisco State University.
- 望月登志子・中脇幸代・渡辺桃子 (2006). 上下接合顔画像における表情の認知. 日本感情心理学会第14会大会予稿集 p.28.
- 中村 真 (1994). 日本人学生の表示・解読規則—嫌悪と悲しみの比較文化的考察— 宇都宮大学教養部研究報告, **28**, (第2部), 15-34.
- 尾田政臣 (2004). 表情認知の生得性についての検討. 電子情報通信学会技術研究報告. HIP, ヒューマン情報処理 **104**(450), 99-104.
- Riggio, R. E. & Friedman, H.S. (1986). Impression formation: The role of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 421-427.
- Rosenthal, R., & DePaulo, B. (1979). Sex Differences in Eavesdropping on Nonverbal Cues. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 237-285.
- Russell, J. A. (1994). Is there universal recognition of emotion from facial expression? A review of cross-cultural studies. *Psychological Bulletin*, **11**, 102-141.
- Shimoda, k., Argyle, M., & Bitti, P. R. (1978). The intercultural recognition of emotional expressions by three national racial groups: English, Italian and Japanese. *European Journal of Social Psychology*, **8**, 169-179.
- Snyder, M. (1974). Self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **30**, 526-537.
- 菅生康子・松田圭司・山根 茂 (1997). 呈示時間と注視部位が顔の表情判断に与える影響. 電子情報通信学会論文誌, J80-A (8), 1319-1323.
- 鈴木晶夫 (1991). 社会的スキルと表情表出能力及び表情認知能力との関連についての検討. 早稲田大学人間科学研究, **4**, 19-26.
- 吉川左紀子 (1997). 表情認識研究の視点. 電子情報通信学会技術研究報告. HIP, ヒューマン情報処理, **97**(388), 69-74.
- 吉川左紀子・中村真 (1997). 顔・表情の違いによる発話行動の調整. 電子情報通信学会論文誌, J80-A (8), 1324-1331.
- 吉川洋子・飯塚雄一・長崎雅子 (2001). 女子学生の社会的スキルと自尊感情およびセルフモニタリングとの関連. 島根県立看護短期大学紀要, **6**, 97-103.
- Wagner, H. L., MacDonald, C. J., & Manstead, A. S. R. (1986). communication of Individual Emotions by Spontaneous Facial Expression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 737-743.

A study of the Relation between Self-Monitoring and Facial Expression Decoding

Kenji Endo

An individual's facial expressions convey the individual's emotional state, attitude, and some social intentions. We recognize others' emotional state through their facial expressions. Several studies have reported high agreement in the judgments of emotion conveyed by facial expressions in different cultures. However, even in the same culture, there are individual differences in facial expression decoding. The skill of facial expression decoding plays an important role in interpersonal relationships. Self-monitoring is considered one such social skill. High self-monitors are most likely to monitor and decode other person's facial expression in interpersonal situations. It was hypothesized that high self-monitors would be better decoder than low self-monitors.

The participants were first-year students (130 females and 85 males), who had little training to accurately communicate their emotional state through their facial expressions. They were exposed to 15 photographs of persons who expressed fear, happiness, surprise, disgust, sadness, contempt, anger, or neutrality from their facial expression. They were asked to judge the emotion these facial expressions conveyed. In addition, participants were evaluated on a self-monitoring scale, and classified as high or low in self-monitoring.

The results indicate that facial expression decoding is differentially affected by self-monitoring and gender. Generally, female students decoded facial expression more accurately than the male students. The decoding rates were very high for emotions like happiness and surprise and low for fear and contempt. High

self-monitors' scores of the decoding were higher than those of low self-monitors. The relationship between facial expression decoding and self-monitoring was proved. Further research directions were discussed.